



下水道の扉

(下水道展で出会った子供たち)

昨年の秋、埼玉大学で開かれた第5回野草サミット(野草サミット実行委員会)に参加した折、関係者から興味深い話を聞きました。それは、このサミットの母体が、もとは野鳥ファンの集まりだったということです。埼玉県にはその昔、野田(現・さいたま市内)のサギ山という有名なサギの営巣スポットがあって、最盛期には3万羽ものサギが生息していたと聞きます。ところが、昭和40年代に入って都市開発に伴う餌場の減少などが深刻化し、営巣数がみるみるうちに減り、ついには絶滅という最悪の結末を迎えたのだといいます。そんな悲しい出来事に遭遇したことで野鳥ファンたちが決起し、野鳥の生息環境をまもるための勉強を始めたのがきっかけだということです。そして、野草が自然生態系を根底から支える存在だと気づき、先述のサミットをはじめとする具体的な活動が始まったと聞きました。筆者が参加した第5回サミットでは野草の自生メカニズムなどを学んだ後、埼玉大学から秋ヶ瀬公園へと足を延ばし、そこで営まれている草木の生態を見てまわったことを覚えています。



野鳥への想いが野草への関心につながった

人には1つの関心事ができると、その扉の先に新たな関心事が見えてくる場合があります。そして、次の扉、次の扉と開いていくうちに、気付けば当初は想定もしなかった分野に足を踏み入れていたという話は、決して稀なケースではありません。探究心の強い人ほど、同時にいくつもの関心事を抱えるものです。

さて、私事で恐縮ですが、筆者は2010年に新しい挑戦を始めました。それは、下水道展のパブリックゾー

ンに立ち、子供たちを中心とした一般来場者のためのガイド役を務めるというものです。2010年は名古屋市で下水道展が開かれたのですが、それ以来、3年連続でパブリックゾーンのお手伝いをさせていただいております。動機は、子供たちに「本格的に下水道への関心の扉を開けてもらいたい」、「そのためのカギを手渡したい」という思いがあったからです。

会場で実際に子供たちと触れ合い、会話をしてみると、それぞれが個性豊かで実に多種多様な好奇心を持っていることに気付かされます。具体的には、ある子供は重機が好きだと言い、またある子供はマンホールのような狭いところに入りたいと言います。

筆者は名古屋・東京(2011年)・神戸(2012年)の3開催で述べ12日間活動をしましたが、その経験を通じて、下水道展におけるガイド役の重要性を改めて感じています。それはやはり確かな手ごたえがあったからです。子供たちと1対1で向き合うことで、例えば「〇〇が好き」などの生の声を聞き出すことができます。そして、それに応じた臨機応変な対応によって、彼らの好奇心にピンポイントで下水道への入口をつなぐ工夫ができるのです。



子供たちと笑顔でコミュニケーション

毎年必ず一人か二人出会うのは、「下水道が大好き」という子供たちです。筆者が1開催当たり対応できる子供の数はせいぜい百人が限度ですので、この一人～二人という数字は決して悲観するようなものではありません。というよりも、そんな子供がいることそのものが正直嬉しい驚きでしたし、筆者としてはじっくり

時間をかけて彼らをサポートすることで、「下水道がさらに好きになった」と言ってもらえる喜びがありました。

それから印象に残っているのは、機械を分解するのが好きだという子供と一緒にまわった時のことです。さすがに展示物を分解させるわけにはいきませんが、分解したら楽しそうなものを探してまわったのをよく覚えています。もちろん筆者自身、そんな目線で下水道展を見学したことがなかったのでも新鮮でした。展示されている設備の隠れた部分まで想像しながら見ていると、ついついパンフレットの細かい構造図にまで目が向き、従来よりも深い部分で技術に触れた気がしました。



子供たちの姿は真剣そのもの

パブリックゾーンの案内に関しては、基本的にブースごとに設置されたクイズを解いてまわるスタイルを採りましたが、この形も功を奏したと思います。なぜなら子供たちにとって、クイズに挑戦することが全ブースをまわる目的になりますし、それを脇でサポートする人間がいることによってゴールをめざすモチベーションが高まると感じたからです。

意外だったのは、小学校の低学年を想定してつくったクイズが大人にも受け入れられたことです。考えてみれば、下水道に関する知識レベルは大人と子供でそう大差がないのかもしれませんが。一方で、「問題が簡単すぎてつまらない」と言う子供もいました。この場合、単にクイズを解くコツをつかむのが早い子と、下

水道の理解が一段階進んでいるために「つまらない」と感じてしまう子が混在するので、そのあたりを見極めることが重要でした。一人ひとりの関心や理解度が分かれば、それに沿った特別仕立ての話（クイズ）をしてあげることが可能で、そのことによって興味をできる限り大きく膨らませてあげることができます。とにかく展示物やパネルが発信する力には限界がありますから、足りない部分は対面のコミュニケーションで補完するしかありません。正直いうと下水道展で授けた知識が、その後すべての受け取り手によって持続的に保持され、各々の生活の中で活かされていくかといえば、それはなかなか難しいのではないかと感じます。ただ、できるだけ多くの子供たちに、本当の意味で「面白い」と思ってもらえる何かを見つけて帰ってもらい、我々も彼らに対して継続的に情報を発信できる術を持つことが重要です。それができれば、彼らの中下水道に関する知識は永く記憶され、さらに理解を深める学習へと彼らを導いてくれることでしょう。



関心の入口になることを願って

人間は日々の暮らしの中でしばしば新しい発見をし、場合によってはそのことに興味を持ち、深く入り込んでいきます。生きることはそれ自体が探究的な学習の積み重ねだともいわれています。下水道界が人々の好奇心や関心に対し、どれだけの扉を用意することができるか、それを実践する場として下水道展は今後ますます重要なものになるはずで

(筆者：中山 勲)

